



日本SPF豚協会だより

2024. 4
No. 95

提 言

我が国における養豚業界の 産学連携の重要性

明治大学農学部農学科 動物生産学研究室 専任准教授

佐々木羊介



養豚関係者とお話させていただく際に、「日本では海外と比べて産学連携が進んでいない」というお言葉をよくお聞きます。確かに、欧米では学会にも多くの生産者や業界関係団体が参加しており、研究テーマも生産現場に則した内容が多い印象があります。ではなぜ日本は海外と比べて産学連携が進んでいないのか、大学の研究者という立場から、主観的な考えを述べさせていただきます。

一つ目に考えられることは「生産現場と研究者の距離」です。近年、研究者が生産者と情報交換を行う場はあまり多くありません。またここ10年でPEDや豚熱などの感染症が発生したことにより、関係者以外の農場立入制限が厳しくなり、研究者が農場に立ち入ることができる機会が大幅に失われています。養豚に必要な知識は栄養学・育種学・繁殖学・管理学・衛生学など多岐に渡っていますが、これらの知識が求められる諸問題は生産現場に溢れており、実際に生産現場に赴くことでその問題を肌身で実感できることができます。また、近年は基礎研究などで得られた知見を実証化することが求められますが、調査協力農場を探すことが難しいという事例もよく耳にします。農場防疫は重要であるものの、生産現場からの協力も産学連携には欠かせないことだと思います。

二つ目に考えられることは「研究予算」です。当たり前ですが、研究を行う際には必ずお金が必要になります。ではそのお金を研究者はどうやって調達するのか。所属する研究機関から配分されるお金は微々たるものですので、基本的には外部の研究助成金の獲得を必死に行っています。その際に、農水省が所管している予算では生産現場への貢献を目的としたケースもありますが、学術的な研究助成金では、研究者が「学術的なインパクト」を優先せざるを得ない場合もあります。一方欧米では、民間企

業や生産者団体が積極的に研究機関に対して研究資金を提供するため、自ずと研究機関で実施する研究テーマが生産現場に則したテーマになりやすい、というスキームがあります。米国では昨年米国養豚生産者委員会(National Pork Board)が養豚教育やアウトリーチ活動を対象として100万ドル(1.5億円)の助成金を拠出すると発表しました。我が国ではまだ養豚チェックオフが法制化されていませんが、今後産学連携を強化するためには、重要なロールモデルになると考えられます。

三つ目に考えられることは「研究者の評価方法」です。研究者の評価には「学術的なインパクト」がある研究を行ったかどうか用いられる場合があります。その際に、生産現場を対象とした試験では、様々な不確定要素が絡むことにより、実験室等で行った試験と比べてどうしてもキレイな結果が出ないということが多々あります。そのため、短期間で研究業績を積もうとした場合、生産現場で研究を行うことは研究者にとって足枷になってしまうリスクがあります。また研究では失敗は日常茶飯事です。目的とした成果が出るためには数年時間がかかることもありますが、私の経験上、生産現場に近い関係者は、研究に協力した際に短期で成果を出すことを求める傾向があると思っています。

これから我が国における養豚業界を発展していくためには、産学連携は必要不可欠だと思っています。欧米と比較して我が国では生産現場に則した研究が多くないことは事実であるものの、研究者の素質が欧米に劣っているとは個人的には思いません。私自身は疫学の専門家であり、生産現場から得られる様々なデータを用いた研究を行っているため、自身の研究を通じて様々な分野の専門家と連携することにより、養豚業界の発展に繋がる研究の推進に寄与できればと思います。

事例発表、講演、年次報告など 多彩な内容

SPF豚セミナーを開催、懇親会も復活

協会では1月25日（木）午後1時より、KKRホテル東京「丹頂の間」において令和5年度SPF豚セミナーを開催いたしました。会場、オンライン視聴合わせ80名の方にご参加いただきました。セミナー終了後には4年半ぶりに懇親会も復活しました。

坂口一平協会副会長の司会のもと、鷺谷敏一協会会長の挨拶に続いて、恒例の認定CM農場生産成績年次報告が行われました。昨年8月に急逝された藤田世秀前専務理事の遺したデータを小林一彦専務理事が再構築し、わかりやすくまとめて報告しました。

続いて、生産成績最優秀CM農場表彰式を執り行いました。総合生産成績部門最優秀賞（2年連続2回目）と商品化頭数最優秀賞（初受賞）の2冠に輝いた(有)高橋畜産（北海道、ホクレンピラミッド）からは、高橋洋平社長の奥様で獣医師の高橋佐和子取締役役にご出席いただきました。

濱岡隆文選考委員会委員長は講評で、日本SPF豚協会が重要な評価項目にしているA薬品費（抗生物質・抗菌剤）が増加傾向にあることに触れ、「表彰農場の選考対象となるような成績上位農場でも、半数がA薬品費の基準値（286円）を超えている。これを改善するために、それぞれの農場内部で課題として共有し、具体策を話しあって行動してほしい」と「PDCA」の必要性を説かれました。



また、「SPF養豚のシステムは、病原体を減らし、宿主をストレスから解放する力のある技術なので、ぜひSPF養豚の本質を理解してA薬品費の削減に取り組んでほしい」と結ばれました。

その後、会長より表彰状とトロフィー（今回より新たなデザインになりました）が授与されました。

続いて、2冠に輝いた高橋畜産に「好成績を維持するための農場管理のポイント」と題し、事例発表いただきました。冒頭で高橋佐和子取締役役は「今回の受賞は、ホクレンをはじめとする関係者からなる「高橋畜産チーム」の受賞、成果であると喜んでいる」と支えてくれている周囲に感謝の意を述べた後、農場の取り組みを紹介、「先代から引き継いで19年になる。この間ずっと2か月ごとに農場内で従業員、関係者と共に生産検討会を続けてきた。事故率、特に冬季が3%ほどになることが課題であったが、今年はそれも改善されたのでさらに成績はよくなると思う。これからも『地元で農場があつてよかった。地元の豚肉があつてよかった』と思われるよう頑張りたい」と述べられました。発表後には会場の生産者から質問が相次ぐなど、関心の高さがうかがわれました。

休憩をはさんで講演が3題行われました。

まず「薬剤耐性（AMR）対策アクションプランについて」との演題で、農林水産省消費・安全局畜水産安全管理課の白川崇大係長にご講演いただきました。白川さんは「AMRの脅威はいずれ癌の死亡率を上回るとされている。前回のアクションプラン（2016—2022）では、目標を達成できなかった項目もあるが、今回のアクションプラン（2023—2027）では、薬剤耐性率に動物種ごとの目標を入れ、さらに使用量の削減（対2020年で15%減）を新たな目標に設定した。国内の動物用抗菌剤はほとんど使用量が減っ



小林一彦・協会専務理事



講評を述べる濱岡隆文選考委員長



白川崇大・農林水産省畜産安全管理課係長



新井達弥・農林水産省畜産振興課課長補佐


トロフィーを手にする(右)高橋畜産の高橋佐和子取締役と
鷺谷敏一・協会会長


大泉俊昭・(農)八幡平ファーム常務理事



4年半ぶりに行われた懇親会

ていない中、CSFの影響があるのかもしれないが、養豚関係の使用量は減っている」と述べられました。また、今年度から構築が始まり、令和7年度から運用開始予定の電子指示書システム構想について紹介がありました。

続いて、農林水産省畜産局畜産振興課の新井達弥課長補佐に「アニマルウェルフェア（AW）に配慮した家畜の飼養管理等について」と題して講演いただきました。新井さんはAW指針について説明「これまで民間から示されていたものがあったが、改めて国として指針を示した。義務ではなくペナルティーもないが、当たり前のことでもあるので、普段の管理の見直しなどをぜひお願いしたい」と述べられました。

最後に、岩手県洋野町の認定農場、農事組合法人八幡平ファームの大泉俊昭常務理事による講演が行われました。題して「私はバイオセキュリティをこう考えて養豚場を3か所つくりました」。大泉さんは商品化頭数部門で10回の最優秀賞を誇る八幡平ファームははじめ八幡平養豚グループの大型認定農場を3農場立ち上げ、いずれも成績優秀な農場に育てた、この業界では知らない人がいないと言ってもいい農場管理のプロ。大泉さんは「まず、病気が入らない

ように防ぐことが大切だが、病気は入ってしまうものなので、入った時の対応を考えておくべき」として、農場内の押さえるべきポイントを整理して解説されました。また、「異常時の対応については、確証がなくともすぐに対処することが被害を最小限にするためにも肝心。もし間違っていたらその時にすぐに認めて直せばよい」とその考え方、ノウハウを惜しみなくご披露いただきました。

なお、協会ホームページにて、当日の講演や表彰式の動画を公開しております。ぜひご覧ください（注：AW指針については農林水産省のホームページで公開中ですのでそちらをご覧ください）。

セミナー終了後には「朱鷺の間」にて懇親会が行われ、60名近い方のご出席をいただきました。表彰農場である高橋畜産の銘柄豚「若松ポークマン」のしゃぶしゃぶも供され大人気、瞬く間に完食となりました。久しぶりの情報交換や交流の貴重な機会となり、予定時間を超えるほどの盛況ぶりでした。

多彩な内容で、参加者にも好評でした。講師、表彰農場、関係各位に心より感謝申し上げます。オンライン含めご参加いただいた方々、誠にありがとうございました。

SPF豚農場と飼養頭数の分布

(2024年3月現在)

表1 認定農場の分布

飼養規模(頭)	北海道	東 北	関 東	北信越	東海近畿	中四国	九 州	合 計	飼養母豚数
99 以下	1	0	2	0	0	2	0	5	267
100 ～ 299	5	4	17	3	0	2	5	36	7,504
300 ～ 599	3	5	6	2	0	6	8	30	12,316
600 ～ 999	1	6	5	1	1	4	11	29	23,202
1,000 以上	2	8	3	0	0	1	7	21	29,382
計	12	23	33	6	1	15	31	121	72,671
子豚育成・肥育専門	2	4	16	1	1	7	21	52	
合計	14	27	49	7	2	22	52	173	
飼養母豚総頭数	7,607	19,502	13,930	2,114	752	7,412	21,354	72,671	

表2 認定農場および飼養母豚数の推移

年度	2019		2020		2021		2022		2023	
地域	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数
北海道	13	6,597	13	7,653	13	7,837	13	7,900	12	7,607
東 北	30	21,355	28	22,704	27	22,377	23	20,257	23	19,502
関 東	41	14,997	40	14,890	40	15,059	37	14,782	33	13,930
北信越	7	2,502	7	2,345	6	2,079	6	2,107	6	2,114
近畿東海	2	729	2	738	2	703	2	710	1	752
中四国	13	6,797	13	6,724	15	7,446	14	6,962	15	7,412
九 州	31	22,556	31	22,602	30	21,747	31	21,763	31	21,354
子豚育成・肥育専門	42		45		49		50		52	
全 国	179	75,533	179	77,656	182	77,248	176	74,481	173	72,671

例年同様、やむを得ない事情により認定を停止(休止)している農場については、戸数は集計に含め、頭数は含めない。GGP・GP 17 農場および子豚育成・肉豚肥育専門農場を含む。前年度に比べ、農場数は小規模一貫農場の退会があった一方で新規申請もあり微減となったが、飼養母豚数は約 1,800 頭減少した。これは新規認定農場がフル稼働していないことや農場事情による減頭等が要因となっている。引き続きマルチサイト方式の農場が増加傾向にある。地域別では中四国地区の飼養頭数が増加した。全国の飼養母豚数 79.2 万頭(令和 5 年 2 月現在、畜産統計)に占める認定 SPF 豚の割合は 9.4%と、前年度を 0.1 ポイント下回った。

CM認定農場の生産成績 (2023年度)

表1 一貫生産農場

	農場数	母豚数	生産指数	農場回転数		農場飼料要求率		出荷頭数 / 母豚		A 薬品費 / 肉豚	
	89	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	23	730.5	125.33	1.97	17.36	3.00	26.51	25.43	47.63	88	33.83
B	22	620.5	110.36	1.85	16.28	3.08	25.85	24.55	46.00	254	22.24
C	22	563.4	100.02	1.68	14.82	3.18	25.11	23.25	43.56	336	16.53
D	22	454.1	90.06	1.57	13.82	3.28	24.31	20.62	38.63	382	13.30
最高成績			140.91	2.27	20.05	2.53	30.20	29.25	54.80	2	39.86
最低成績			83.45	1.14	10.06	3.67	21.26	16.78	31.44	448	8.65
平均値		593.7	106.66	1.77	15.59	3.13	25.46	23.48	44.00	263	21.61

表2 繁殖専門農場-Ⅱ（分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場）

	農場数	母豚数	生産指数	分娩回数 / 年		離乳頭数 / 母豚		出荷子豚数 / 母豚		A 薬品費 / 子豚	
	11	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,333	124.92	2.44	21.22	26.54	23.56	26.38	49.24	73	30.89
B	3	590	112.74	2.29	19.86	25.04	22.23	23.71	44.26	109	26.39
C	3	729	100.79	2.13	18.53	22.59	20.05	22.04	41.14	152	21.07
D	2	917	92.35	2.30	19.97	22.55	20.02	20.98	39.15	215	13.21
最高成績			127.37	2.47	21.45	27.67	24.56	27.41	51.17	20	37.44
最低成績			91.21	1.92	16.68	19.91	17.67	19.07	35.59	249	8.90
平均値		890	109.09	2.29	19.89	24.33	21.59	23.49	43.84	130	23.77

表3 肥育専門農場-Ⅱ（繁殖専門農場-Ⅱまたは子豚育成農場から子豚を導入し、肥育している農場）

	農場数	出荷頭数	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A 薬品費 / 肉豚	
	15	平均		実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	4	4,734	126.96	2.79	63.55	98.34	33.39	63	30.02
B	4	11,665	112.82	3.11	58.12	98.05	30.51	100	24.19
C	4	10,946	93.84	3.43	52.82	97.76	27.62	168	13.40
D	3	4,898	76.38	2.79	63.55	94.12	-8.83	115	21.66
最高成績			134.81	2.28	72.07	99.45	44.51	8	38.71
最低成績			69.03	3.62	49.62	93.56	-14.42	196	8.82
平均値		8,271	104.24	3.05	59.24	97.26	22.64	111	22.36

表4 肉豚または子豚1頭あたりのA薬品費

一貫生産農場

薬品費 / 肉豚	農場数	割合 (%)
100 円未満	15	16.9
100 円～199 円	14	15.7
200 円～299 円	17	19.1
300 円～399 円	29	32.6
400 円～450 円	14	15.7
計	89	100.0
基準値 (286円) 以内	44	49.4

繁殖専門農場 (繁殖-Ⅱ)

薬品費 / 子豚	農場数	割合 (%)
100 円未満	4	36.4
100 円～199 円	4	36.4
200 円～250 円	3	27.3
計	11	100.0
基準値 (160円) 以内	7	63.6

肥育専門農場 (肥育-Ⅱ)

薬品費 / 肉豚	農場数	割合 (%)
100 円未満	7	46.7
100 円～200 円	8	53.3
計	15	100.0
基準値 (126円) 以内	8	53.3

第17回

農場バイオセキュリティ強化のための最新情報



豚のふん便で汚れた作業着の清浄化

アニマル・バイオセキュリティ・コンサルティング(株)

三宅眞佐男

豚のふん便で汚れた衣類の汚れ落としと除菌を一工程の洗濯で行うための、より有効な洗剤と消毒剤の組み合わせを検討しました。再現性を担保するため0.5gのタオル片を豚のふんと蒸留水の1:1混合物に一定時間浸漬した布片を用いました。まず、3種ずつの液体と粉末洗剤を使用説明書の濃度に希釈し2時間洗濯した結果、最も汚れ落ちが良かった粉末のTEXを以後の実験で使用しました。汚れ落ちの状態は最も白いレベルをL 0としてL10までの10段階で表し、一般生菌数の対照に対する除菌効果等を表にまとめました。

1は過酢酸製剤Vと防さび剤KLを用いて、汚れ落ちと除菌効果が最も高い組み合わせです。2は1からKLを除いた結果です。除菌効果は上がるものの汚れ落ちが悪化します(図1)。3はVとKLの濃度を1の半分にした結果です。Vの過酢酸濃度が減衰し、除菌効果が落ちました(図2)。4は複合塩素剤VSを用いた例でコスト安ですが、汚れ落ちも除菌効果も不十分です。5の逆性石けん液Lを用いると除菌効果はありますが、洗剤の有無に関わらず殆ど汚れが落ちません。理由は陰イオン性の洗剤と陽イオン性のLのイオン拮抗が考

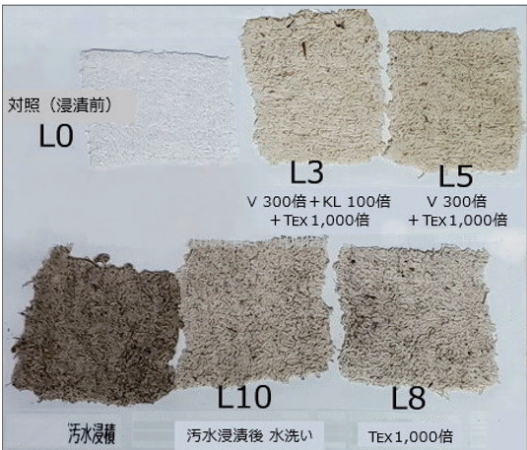


図1 V300倍 + TEX1000倍 (+ KL100倍) 溶液の汚れ落とし効果

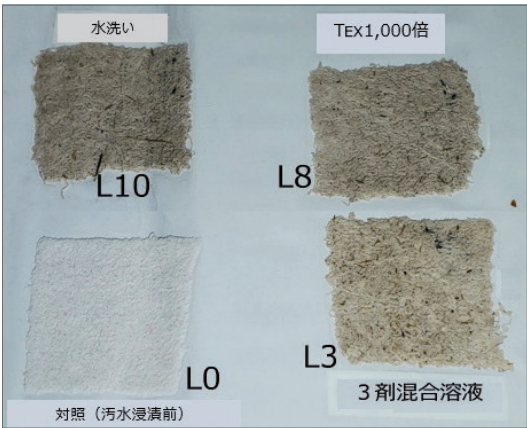


図2 V600倍 + KL200倍 + TEX1000倍溶液の汚れ落とし効果

えられます。コストは安くても洗剤と混合出来ません。洗濯後の乾燥は、乾燥機を使用することが有効です。家庭用のヒートポンプ方式では電気代が抑えられる反面、槽内の温度が約65℃と低く、電気加熱方式でも80℃以下に対して、ガス乾燥機は80～100℃の温風で乾燥するので残存菌の除菌に有効です。

なお、外干しは紫外線が内面や隅々にまで当たらず、乾燥しても菌が残り易いので推奨しません。

※詳細は「豚病研究会報 第82号R5年8月号三宅眞佐男」参照

	汚れ落ち	除菌効果	水	洗剤 TEX	消毒剤	防さび剤 KL	コスト ¥
1	L3	≧10 ²	30L	30g (1000倍)	V100ml (300倍)	300ml (100倍)	579
2	L5	≧10 ⁴	〃	〃	〃	—	297
3	L3	≧10 ¹	〃	〃	V50ml (600倍)	150ml (200倍)	294
4	L4	≧10 ¹	〃	〃	VS 60g (500倍)	—	120
5	L9	≧10 ²	〃	〃	L 60ml (500倍)	—	99

※L3～9: 汚れ落ちレベルを示す。L0は白色、L10は汚れが落ちていない状態
※TEX: トップEX、V: ビネパワー、KL: KOUKIリキッド、VS: ビルコンS、L: ロンテクト

表 消毒剤などの薬剤と洗剤の組み合わせ内容及び汚れ落ち効果

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPFポークのしょうが焼き

●レシピ提供・中目黒 野菜居酒屋 はな豆（東京都目黒区）

店主 三原葉子

今回は豚肉料理の定番中の定番、しょうが焼きですが、秘伝のたれを伝授いただきます。家庭でもプロ顔負けのおいしいしょうが焼きをつくれそうです。たれのアレンジも教えていただきました。ぜひお試しください。

●材料●（2人前）

SPF 豚ばら肉薄切り（5ミリ程度） 100g
 玉ねぎ 4分の1個
 こしょう 少々
 小麦粉 少々
 しょうが焼きのたれ 大さじ3
 <しょうが焼きのたれ>（作りやすい量）
 みりん 100g
 しょうゆ 150g
 砂糖 50g
 しょうが 150g
 にんにく 2分の1かけ
 はちみつ 小さじ1

●つくり方●

- ① たれを作ります。生姜の皮をむいてざく切り、芽をとったにんにくとしょうゆと合わせ滑らかになるまでミキサーにかけます。鍋に入れ、煮切ってアルコールを飛ばしたみりん、砂糖、はちみつと合わせ、火にかけて混ぜながら沸騰させて砂糖がしっかり溶けたら完成です。
- ② 玉ねぎは皮を剥き1cm程のくし切にします。
- ③ バラ肉を3等分に切ってバットにひろげ、小麦を両面にかけ余分な粉を払い落とし、片面にこしょうをふります。
- ④ テフロンのフライパンなら、油を入れずに③を並べてから火を付け、中火で両面さっと焼き、②を入れ、肉を上にして弱火でふたをし1分焼きます。
- ⑤ 1分経ったら、ふたをはずしてしょうが焼きのたれを入れて全体にまぜ、少し焼き色が付いたら完成です。
- ⑥ レタス等をのせた皿に盛り付け、最後にお好みで白ごまを振ると店の味です！

★三原シェフからのアドバイス

しょうが焼きのたれはアレンジ可能！コチジャンを加えて焼肉のタレに、粉花山椒、すりごま、酢、ラー油を加えたらよだれ鶏のタレになります。
 粗熱がとれたら冷蔵庫へ。1週間程で使い切りましょう！

認定情報

●2024年3月認定農場

（有効期間：2024年3月7日から2025年3月末日まで）

岩手県・（農）八幡平洋野牧場、秋田県・（株）シムコ大館GGPセンター、全農畜産サービス（株）由利本荘SPF豚センター、全農畜産サービス（株）秋田大仙SPF豚センター、（有）十和田湖高原ファーム、宮城県・（株）シムコ岩出山事業所、茨城県・（有）中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、同実験動物豚舎、千葉県・（株）シムコ館山事業所、鈴木治彦養豚、（株）スタービッグファーム、同肥育農場、（株）飯田ファーム、（有）ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、（有）伊藤養豚飯岡農場、（有）鍋木ビッグファーム、宝

※次回認定委員会は2024年6月6日（木）の予定

理養豚繁殖農場、同肥育農場、長野県・（農）エスピーエフコがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・（株）シムコ八尾GGPセンター、愛知県・（株）知多ビッグ前山農場、同美浜農場、島根県・奥出雲ファーム（有）、熊本県・全農畜産サービス（株）西日本原種豚場、（有）やまとんファーム、（有）ビッグファーム陳、（株）佐々牧場、同第二農場、宮崎県・（株）ナンチクファーム守山細田農場、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産（株）出水農場、同阿久根農場（以上35農場）

協会からのお知らせ

●理事会を開催しました

3月25日（月）、協会事務所において令和5年度の理事会をリモートとのハイブリッド方式で開催し、6月の代議員会に諮る議案等について協議いたしました。

●北島前会長が 養豚学会養豚功労賞を受賞

北島克好前協会会長（顧問、監事）が第17回日本養豚学会養豚功労賞を受賞されました。誠におめでとうございます。詳細は次号でお知らせいたします。

●故藤田世秀前専務に 顕彰状を贈呈

故藤田世秀前協会専務理事の長年の功績を讃え、顕彰状を作成し、協会を代表して親交のあった下山正大理事と事務局でご自宅に伺い、ご遺族に贈呈いたしました。



株式会社
科学飼料研究所
動薬部
(群馬県高崎市)



動薬部の皆さん。

右から4人目が石橋博取締役、
2人目が大石勝彦さん



単なる飼料メーカーではない チームの一員として生産者をサポート

今号の「SPFのひと」は賛助会員である(株)科学飼料研究所(略称科飼研)のご紹介です。

科飼研は飼料および飼料添加物はじめ動物医薬品の製造・販売も手掛ける全農グループのメーカーです。経営理念は「私たちは『強いものづくり』の実現とお客様への『安全・安心』の提供を通して、我が国の畜水産の発展と環境保全に貢献します」。

会社創立は1967年、配合飼料原料として不可欠なビタミン、ミネラル等の飼料添加物を専門に製造するために設立、その後動物用医薬品、哺乳期用人工乳・代用乳、養魚用飼料等の製造・販売へと事業拡大して来ました。4工場(群馬県高崎市、兵庫県たつの市、宮城県日南市、栃木県大田原市)と開発センター(千葉県佐倉市)、5つの事業所(札幌、東北、関東、北九州、南九州)を構え、全国展開しています。現在は豚熱ワクチンの製造も行っています。

本社は東京都中央区にあります。協会会員はじめ養豚生産者とながりが深い動薬部は、基幹工場である高崎工場の一角に事務所を構えています。

お話を伺った動薬部を率いる石橋博取締役動薬部長は地元群馬出身で動薬部一筋40年、全国各地の勤務を経験されました。石橋さんは「我々の強みは単なるメーカーではない、生産者を支える系統チームの一員だという点です」とおっしゃいます。全農グループの協会認定農場の立ち上げに際しては、農場に入って従業員とともに農場業務に従事することも。5つの事業所にはすべて診療所を併設、獣医師を配置し、生産者をサポートしています。

動薬部販売企画課の獣医師、大石勝彦さんもその一人、他のJA組織やペット関連の会社の勤務を経て現在に至ります。5つの事業所の受け持ちは広範囲にわたるため、出張も多く移動の負担も大きいです。「農場の衛生管理や疾病対策に少しでも役に立てたらという気持ちでいます」。また、「農場の一員のように携われることが魅力です。信頼されるのが何より。性に合ってます」とも。SPF豚農場に対する防疫意識も高く「かなり気をつけています。病気を持ち込まないための努力、工夫は常に怠りません」(石橋さん)。ピラミッドの認定委員会にも動薬部の獣医師を派遣するなど、SPF豚農場認定の一端を担っているという自負もお持ちです。

今後について何うと、動物薬専門工場の新設も計画しているということです。「GMP(医薬品及び医薬部外品の製造管理及び品質管理の基準)も厳しくなっている。薬剤耐性(AMR)対策、アニマルウェルフェアにも配慮しつつ、注射を減らす投薬などのニーズにも応えられるよう努めたい」と石橋さん。

最後に石橋さんから協会へ。「いつも認定農場産SPF豚肉を贈答用に使っているのですが、贈り先から『こんなきれいで臭みがなくおいしい豚肉は見たことがない』と言われます。協会も消費者にSPFポークのおいしさをもっとアピールしてはどうですか?」と、長年の課題であるご指摘を受けました。お言葉肝に銘じます。

生産者とともに歩む科飼研、これからも信頼される存在であり続けていたきたいと思いました。

(編集部)

編集後記

能登半島地震で被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。人の飲み水も食料もままならない中、懸命に家畜の水や飼料の確保に動かれた方も多かったと聞きますし、今でも回復にご尽力されている方が多くいらっしゃるかと思います。

1月のSPF豚セミナーで「感染症はまず防御、でも入ってしまった時の対策も事前に考えておくことが大切」との講演がありましたが、震災リスクのない場所はないと言われる日本で皆様の震災時の想定・対策は如何でしょうか。(岩魚)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会の

登録商標です

日本SPF豚協会だより

第95号 2024年4月1日発行(季刊)

発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2

TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376

e-mail:j.spf.a@nifty.com

http://www.j-spf.com/

発行人 鷺谷 敏一

編集人 小林 一彦